時代屋・弐

試し読み

御江戸八景

大名の娘ノ景　丁稚
髪結ノ景　川尚
町火消しノ景　丁稚
内儀ノ景　川尚
御家人ノ景　丁稚
留守居役ノ景　川尚
紅屋ノ景　丁稚
お白州役人ノ景　川尚

大名の娘ノ景

「子貢が曰わく、貧しくしてへつらうこと無く、富みて驕ること無きは、いかん。子の曰わく、可なり。未だ貧しくして…」

とある大名の中屋敷。その庭に面した座敷の一つから、論語を諳んじる声がする。不思議なことに男ではなく、女の声だ。

武家の女は才のないを以って徳とする、と言う考えが罷り通っていた時代に、論語を諳んじる女性が居るのは珍しいことだ。

敦姫の一日は、六つ半頃に女中に起こされる事から始まる。夜着の上で洗面を済ませて、一日おきの風呂に入った後は、化粧と衣服を整えて母と姉、そして弟と一堂に会し、ご先祖の位牌にお参りする。その後は一汁一菜の朝餉を取って暫くすると、これで四つになる。ごくのんびり、ゆったりとした大名家の奥向きの生活だ。

だが、最近の敦姫は朝餉が済むと、目に見えて落ち着かなくなってくる。

それはもちろん、論語を教えに兵吾が来るからだ。論語を捲ったり、今日の箇所を諳んじて見たりするが、どうにも落ち着かないのだ。

しかし、いざ兵吾が来ると、心の臓が口から飛び出しそうになる。折角習った論語を忘れてつかえたりしないだろうかと、心配になってくるからだ。

そんな気持ちをどうにか抑えて座敷に入れば、挨拶も早々に論語の読み下しから始まる。

「…賜や、始めて与に詩を言うべきのみ。諸れに往を告げて来を知る者なり」

読み下しが終わった敦姫に向かって、

「大変に宜しゅうございます」

と、きりりとした顔立ちの青年が、頷きながら声を掛ける。それだけで、泣きそうになりながら論語を勉強した甲斐があるというものだ。

「これは、賜、つまり子貢ですね。彼が貧乏であってもへつらわず、金持ちであってもいばらないというのは、いかがでしょうか。と孔子に問いかけているのですね…」

後の説明は聞いていないに等しい。

宜しゅうございます、この一言を聞くためだけに、訳の判らない論語を読んでいるといっても良い。いや、訳が判らないでは困るのだ。この賜と孔子のように、目の前の青年と深く語り合いたいのだ。

しかし、そのために中屋敷詰めの老家臣に、論語の読み下しを予め習っているのは、兵吾には絶対内緒だ。

「何かここまでお聞きになりたいことは御座いませんか」

「あの、兵吾様…、いえ先生。この『切るが如く、磋るが如く、琢つが如く、磨くが如く』、つまり切磋琢磨すると言うのは何故そのように言われるようになったのでしょう?」

青年はきょとんとした。

今のは、余りに初歩的な質問だったか…。しかし、今日の論語は兵吾が感心しそうな質問どころが無かったのだ。しかし、兵吾の話はいつまでも聞いていたい。何でも良いから、話の端緒を、と思った気持ちが露骨に出てしまったか…。敦姫は恥ずかしくなって俯いた。

しかし、兵吾はにっこりと笑うと

「敦姫様は、本当に熱心でいらっしゃる。昌平坂の門弟達に見せてやりたい程です。切磋琢磨は、詩経の衛風（えいふう）・淇奥（きいく）に記述が認められます。それぞれ切る、研ぐ、打ち叩く、磨くと言うことで、細工師の技工や完成した細工品に喩えて衛の武公を讃えたことから、学問や精神、人格を磨き、向上することを意味するようになったのです。衛の武公と言うのは…」

と滔滔と説明を始めた。敦姫はほっと胸を撫で下ろした。

もちろん、衛の武公のことなぞ知ったことではない。そんな遠い国の遥か昔の武将だか皇帝だかなぞどうだって良いのだ。

ただ、この兵吾に軽蔑されるようなことだけはしたくない。

しかし、如何に知ったことではなくても、聞いておかないと更に深く語り合うことは出来ない。敦姫は、うっとりとしそうな己を叱咤し、兵吾の話に注意を戻した。

縁側に向かって開け放した障子の外からは、池を渡ってきたそよ風が、座敷まで吹き込んでいる。外は蝉の声が五月蝿い位だが、庭の池やうっそうと生い茂った木々が夏の日差しの暑さを少し和らげている。

四つに始まる兵吾の論語は、昼の九つ過ぎには終わってしまう。そして、兵吾に会える日も、残り少なくなってきた。あと一月もすれば、敦姫は顔を見たことも無い、どこぞの大名に輿入れしなければならないからだ。

兵吾こと坂上兵吾は、百石の旗本の嫡男だが、六つ上の兄の同門であった。兄は昌平坂学問所に通っており、そこで坂上兵吾と知己を得た。嫡子として上屋敷へ移るまでは、兄は敦姫や三つ違いの姉、母とこの中屋敷に住んでおり、比較的自由が利いた所から、兵吾は良く遊びに来ていた。そこで敦姫が兵吾と面識を得たのだ。

上屋敷へ兄が移ってからは、兵吾と会う機会は無かった。

それもそのはずで、敦姫の父は幕府で側用人を努めている。如何に兄の友人であろうと学問を終えてからは、百石の旗本がなかなか気軽に側用人の上屋敷に遊びに行く訳には行かない。

髪結ノ景

親方にも言われている、一緒に暮らしているなら身を固めろと。固めなければ任せないとも酒の席では脅しに似ることすら、ある。

浅草は奥山といえば悪所と知られている。見世物、揚弓場、辻講釈に手妻遣い、居合い抜き、遊興の類がなんでもあった盛り場は悪党がぞろぞろつく場所でもある。ほどほどに楽しんで、独楽回しや口上の嘘に騙されてヤイヤイと帰るのがいい、奥山の奥は深いとされ、知るものだけが知っている世界だった。そんな奥山界隈で八郎は悪さならなんでもやった、やってないのは人殺しくらいで、盗みはもちろん恐喝から詐欺まで、兄貴分の男の後ろをついて回って、なんでもやっていた。掏摸でしくじってところの八丁堀に捕まえられたのが十五のときで、そして親方に預けられたのだった。

「てめぇの兄貴分に頼まれた、ガキが煩くてかなわねェとよ」

縄をかけた八丁堀は鶴橋、通称つるの旦那、嫌みなほどに細い髷の先やら撫で肩からぬるっと伸びたような首、あぶらけのない痩身の風貌からそう呼ばれていた。鶴橋は口の片端をあげて云った。

おいらはここでも要らなくなったと、そのときはそう思って、兄貴分を恨みもしたが、ほんとうはさみしくて仕方がなかった。だから、さみしいからただ黙々と親方に怒鳴られては行く場所もないから、髪を結うのを覚えた。反発して飛び出しても帰ってくる場所は親方とおかみさんがいる小網町『花い床』、東西の掘留川に挟まれた橋を渡ることすら出来なかった。とにかくしがみつくようにして十年、あるとき台箱（鬢盥）を持たされ、廻り髪結いとして客を回ることを許された。それは腕を信用されたということで、嬉しくもあるのだが一方で気になることでもあった。僻み歪んだりした八郎とてもはやこの年になって追い出されたとは思わない、あといくらも経てば暖簾分け、独り立ち、そんなことすら考えて当たり前の年である。そうではなく、ずいぶんと拵えのいい台箱が用意されていることだった。『花い床』にはすでに兄弟子が二人いる、いづれも幼い頃から親方がしこんでいるので腕は確かだ、親方夫婦には子供がいないことからどちらかが内床を継ぐことにはなっているのだろうが、なんというか、兄弟子達を出し抜いてしまったような気がしたのである。もちろん嬉しくないはずはない、二人とも飴色のつやのある拵えの箱を見て目を剝いていたのだ、おみそれいったかと鼻を高くしたものだった。

しかし、持てば分かった。それは自分の身にも相応しくないほどに立派なものだったということをだ。木目に渋をふくませたような木の色は黒が勝ち、さっと朱で波に花を流す模様は髪に簪を挿すのを重ねているのだろう、それがぜんたいで飴色に光る。縁金具がはまっていてともすれば箱として浮きがちな黒を引き締めていた、引き出しは引っかからず、木のいい匂いがする。また歩いてもぶら鐶ががちゃがちゃ煩くならないような工夫がしてある。自分には勿体ない、親方のこれを励みに、これに相応しい髪結いになるようにという親心は泣けるほどに有り難く感じられたが、でもいっこうに追いつけないような気がした。

持って二年、未だ身にそぐわない黒漆の台箱に仕事道具の一切合切が仕舞ってある。

「おう、はち」

毎朝、八郎は江戸橋を渡って八丁堀の組屋敷に通う。

表通りの横手に入り、勝手に近い木戸を叩いて下男にあけてもらう。役宅の縁に回ってそうしてこていな庭を眺めながら主の髪を結うのである。

下男の市蔵に通されるとすでに濡れ縁には北町奉行所定町廻り同心の榎本が座って待っていた。

日剃り髪結いという。

江戸はいつでも埃っぽい。だから江戸に住む者は必ず湯屋に行く。大抵は仕事が終わってから暮れのころで、朝湯に行くのは暇な隠居だの彼のような定町廻りだったりする。しかも誰もいない女湯に入るのが忙しい定町廻り同心、特に与力の特権だった。朝、湯屋へ行き、そしてさっぱりしたら八郎のように髪結いを呼んで髷を拵える。変事がなければ毎日欠かさず行う、正月でも盆でもそうだ、八郎は台箱を持たされたときから通っている。

二年前、単に親方の手が回らなくなった遠方の贔屓客に対する出店のようなものかと思ったら廻り髪結いはあれこれ筋を通さなければならなかったらしい、すぐさま榎本に引っ括られた。榎本は日本橋界隈を廻り筋にする同心、はっきり言って震えた。北町の鬼との異名とる男として浅草でもちらほらと名前を知られていたからだ。朗らかそうな中肉中背の男が、一度凄めば肝が冷え、またずんと響く胴間声といい、剣の腕といい、小悪党なんぞ造作もないとたやすく倒せるほど強いのである（だが酒と妻の美和には弱いことを八郎は知っている）。わけを話したが過去が過去だけに昔を知っている老獪な目明かしもいて、信用もなくなかなか聞き入れてもらえない、番小屋にいる全員の髪を結ってその場はなんとか収めてもらったが、親方と引き合いに連れ出され、足がじんじんしてくるほど詰めて話し合い、次は町名主に挨拶やらで、その翌日は一日潰れた。親方に片棒担がされたようなところか、ともかく話が本当と分かれば榎本は何もせず毎日役宅に髪を結いに来ることのみを告げて自分を解き放った。

内儀ノ景

くらァ、と高いような喉に痰の絡んだようなはっきりしない声が聞こえる。烏である。

「あァもゥ眠いったら…」

おせいは鬢を掻きながら鏡を覗き込む。ここは吉原、境町に見世を構える『いづみ屋』はいちおう大籬である。

吉原の夜は遅い、大引け（午前二時ごろ）が呼ばわれてから廓内の明かりは落ち、シンとはなるが、かさかさこそこそと慎ましく音はする。それは客と遊女との密談であったり、睦み事であったりで、暗がりの中そわそわしていて、それはまるで得体知れない生き物のようだ、のろりぞろりと闇に這う。楼閣が静まる時間などまずもってない。嫁いで住み慣れた場所ではあるが、そんなざわついた夜に眠れないこともある。廊下伝いに昨夜はまたひどくびりびりしていた。

「勇吉、朝だよゥ」

ちゃっちゃと身支度をしてから二階の息子に声をかける。姉のちぐさはとっくに起きていて、台所に立っている。小さい頃から板場が好きで、板前にはなれないだけに夫婦の悩みの種ではあるが、女中と一緒になってきちっと膳を拵えるので助かるのは確かで、花嫁修業ということにして甘えている。年頃なので何かと心配ではあるが、離れて暮らすのもこたえた。思い切って離れを建てたのは勇吉が生まれたときだ、夫婦の寝所と子供達の部屋は楼閣の建物とは廊下一本でつながる。

「勇吉」声もない。

あがるとはしご段は不機嫌そうな軋りをあげるが気にしない。

「ほら、起きねェ」

「…寒い…」読み散らかしたらしい草紙と布団にくるまったままの蓑虫。おせいは息を吐いて布団を引きはがす。呆れたことに綿入れを着て寝ている。

「顔洗って着替えておくんだよ。お母っさんは見世に顔出すから」

「姉ちゃんは」

「まま作ってるよ」

渋々と起き上がる、年が離れていることもあって姉弟の仲は良く、勇吉はちぐさによく懐いていた。

くわァ。らァ。

廊下を歩くと黒いものが薄墨色の天蓋にいびつな丸を描いているのが見えた。芥溜まりに残飯をあさりに来ている烏の群れである。吉原の朝は時の鐘の音ではなく、烏の声だった。

「……」なんだか数が多いような気がして首を捻る。

吉原の大門を入ると広い仲の町が広がる、そこに面してずらり並ぶのは季節毎の花たちであり、また引手茶屋である。ここの床几に腰掛け眺めるのは桜、菖蒲、ススキで炬燵が恋しくなるこの季節は花でなく実をつけた蜜柑の木となる。火防ぎのため妓楼の庭に蜜柑を撒くのだが、これに倣っているのである。

吉原には小見世や切見世もあるが、思い切った遊びするには引手を通じないことには話にならない、ここからつないでもらって客は大籬に足を踏み入れるのである。引手から廓、通りに面しては格子の張見世、入れば中には帳場に階段、二階は廊下に沿って座敷があり、一階の建物の奥は内所、見世先から階段下、帳場までを見渡せる楼主の居る場所である。

廓の朝は当然遅い。

そしておせいのすることは決まっている、寝坊助どもを叩き起こし、そうして支払えない客には付き馬をつけるのだ。いづみ屋には主がきちんといる、なのでおせいは客と顔を合わせる必要がない、するのは遊女達の世話だ、約束した客が来ずにふて寝している昼三の布団を引きはがし、愚図る禿に手を焼く新造を慰める。内証で煙管を遣るだけでは体が鈍ってしまってどうしようもない、よせと止められたが生来、動かずにはいられない性分なのだ、嫁いでひと月で亭主半左衛門は諦めてくれた。

「おカァさん、昨日はどうしたんだぇ？　いやにうるさくッて眠れやしなかったよ」

内所で挨拶に来た遣り手に茶を出す、隣では亭主がごろんとなっている。寝所に行けばいいのに、といつも思うが生まれも育ちも吉原の半左衛門はさわさわする中でこそぐっすり寝れるらしい。

遣り手はこの茶屋にもう三十年はいる、とよという遊女上がりの古参である。お職を張っていたが、年季の明ける前に客同士の諍いで逆上した武家の客に斬られ、死線を彷徨いながらどうにか生還したが、吉原から出られなくなるという不幸を背負ってしまった女だった。

「それは」

ひどくぎょっとしたような顔になる。

「なんだい、お化けでもみたよな顔して」

とよは少し黙って、考えるように俯くとまなじりを決し、屹然とおせいを見た。

「心して聞いておくんなさいまし、内儀さん」

「はいな」

「幽的がでました」

「……」

御家人ノ景

夜が白々と明け始め、周りが徐々に明るくなってくる。そんな時分に、伸之介は座敷の一つに篭り、文机に向かって筆を走らせている。頼まれた写本だ。

夜に行灯を使うほどの贅沢は出来ない。収める日が迫ってきて、夜を徹しなければどうにもならない時以外は、陽が沈むと共に床に就き、辺りが白々と白んでくる頃に起きて、明るい時間を目一杯使うのが常なのだ。

妻の使う鋏の音が良く聞こえる。

庭に面した小さな灯り取りの障子を開け放しているからだ。

これからの時期に合わせた何かの手入れか、それとも破れ住まいを彩る趣味の生け花に使うあれこれを、庭から採っているのか。

大分明るくなってきた。六つ過ぎ位だろうか。伸之介は、屈めていた背中を伸ばし、大きく背伸びをした。と、大きな欠伸がでた。

「まあ、大きな欠伸」

くすくすと笑いながら、妻の弥紗世が庭から声を掛けた。

「そろそろ朝餉にしましょうか」

弥紗世が縁側から、両腕に何やら抱えて上がって来しなに声を掛ける。

「ああ、そうだな」

伸之介は筆をおくと、また伸びをしながら立ち上がった。

須走伸之介は、無役の御家人だ。

御家人にもピンからキリまであるが、伸之介は家禄すらない最底辺の御家人である。そもそもが御家人はお目見え以下なので登城もなく、無役のため仕事もない。また家禄がない、と言うことは家柄に応じて貰える収入がない、と言うことだ。更に、仕事もないということは扶持、役料と言った収入もないのである。あるのは、すっかり荒れ果ててしまった組屋敷だけだ。

それも、日々の糧を得るのに精一杯で、屋敷を修繕することもままならない。

ならば手入れも出来ない屋敷なぞ売ってしまえば良い様な物だが、須走家の祖先が、公方様から拝領した組屋敷だ。万が一売ろうなぞすれば、一家で詰め腹を斬らされかねない。荒れ果ててしまっても、ここに住み続けなければならないのだ。もちろん、土地屋敷を貸し出すことも出来ない。そもそも、武家地にある小さな屋敷を、借りたいと言う他家の武士が居るわけもない。もし居たら、幕府の決めたことに従わなかったと言うことで、反逆罪である。何処に誰が住むか、と言うのは幕府が全て決めるのだ。勝手に引越しすることも出来ない。更に武家地に住みたいと言う町人も居ないのだ。

究極の手段としては、御家人株を売ってしまうことだが、須走家程度では結局芭字、帯刀が許される程度。よっぽどの金と、才覚がなければ御家人から出世も出来ない。いよいよとなれば、それでも良いと言う者があれば売ることもあるかも知れぬ。だが、今は誰も興味も持たない。しがみ付きたくてしがみ付いているわけではないが、御家人から解放してくれる者もないのが、正直な所だ。

もう少し大きな組屋敷を拝領していれば、長屋の部分を貸家として貸し出し、賃料で収入を得る事も出来たのだが、須走家が拝領した屋敷にはなかった。

無ければ無いで仕方がない。ただし、時間だけはたっぷりあった。

そこで、伸之介は筆耕の内職をして何とか糊口を凌いでいる。

須走家は貧乏だったが、両親が何とかやりくりして一通りの学問はやらせてくれた。修めたはずの学問はもうすっかり何処かに行ってしまったようなものだが、字だけは上手かった。そこで、字を書く仕事なら何でもやってきた。

戯作を版木に彫るための筆耕や、行灯の文字書き。多少の絵心もあったから、地口提灯などの絵入れもやっていた。代筆や写本なども頼まれる。

須走家の跡継ぎになって後も、相変わらず無役のままだった伸之介は、明けても暮れても内職ばかりしてきた。

いつまでも独り身で居るのを心配した知り合いが縁を纏めて、ようやっと、同じ御家人の家から弥紗世を嫁に迎えたのが一昨年の事だった。

弥紗世は、嫁入りの次の日から早速、荒れ果てた庭に手を入れ、なにやら育てては膳に乗せたり、植木市に出したりしているようである。その傍らで、仕立ての内職もしているのだから、伸之介よりもよっぽど実入りが良い。

それでも、内職で手にする銭には限りがある。よって須走家の暮らし向きはとんと上向かない。来る日も来る日も明日の糧は大丈夫か、と言う心配しか出来ないのだ。特に弥紗世がもうすぐ子を産むとあっては、少しでも蓄えを作っておかねば、子供に最低限の学問をさせることも出来ない。

もしかしたら、これから産まれてくる子供が、何か拍子でお役に就けるかもしれないが、よっぽどのことがない限り、無役のままなのだと思う。子供もずっと一生内職をして暮らしを立てていくのだとしても、何か一生の役に立つように、最低限の学問だけは学ばせてやりたいと伸之介は思っていた。

弥紗世は、大きなお腹を抱えて、竈に埋めておいた置き火を掘り出している。火を

紅屋ノ景

「暑いなぁ…」
ふう、とため息を吐いて、勝昌は空を見上げる。まだ陽も昇っていない夜空だが、さっきよりは薄ぼんやりと明るくなってきたような気がする。
少しでも冷たい水で紅を仕込まなければならない紅職人にとって、夏は厳しい季節だ。夏は少しでも涼しい、八つ半過ぎには起きて仕事が始まる。
後は暑くなっていくだけなので、彼らにとっては時間との戦いだ。
しかし幾ら陽も昇っていない早朝とは言え夏は夏。少しでも動けば暑くなる。
「もう暑いですねぇ」
ふう、ふうと大義そうに息を吐きながら、見習いの小僧が言う。
何かと言えばすぐにさぼりたがるのがタマに傷だが、まあ、この年頃の小僧などこんなものだろう。
「アヽ。コレサ、手が止まってるぜ」
そう言いながら、すっかり汗まみれになった手ぬぐいで、汗を拭う。
しかしこれでは汗を塗り広げているのと大差ない、と気づいて、いい加減くたびれた手ぬぐいを見つめ、顔をしかめた。
「腹が減ったァ…」
と、ついさっきにも同じ事をぼやいた小僧に、
「皆お前と同じだッサ。早く終わらせねぇと、皆の飯も遅れて、大目玉だぜ」
そう言いながら、紅餅を入れた桶に、井戸から水を注ぐ。玉川上水から運ばせた清水は、夜の間にすっかり冷えて、跳ねる水しぶきが気持ち良い。

江戸は水道が自慢だが、その水道の水ですら、上質の紅を作るのには使えない。江戸の水道は玉川上水と神田上水から、樋を通して江戸中に流しているが、雨が続けば濁り、また場所によっては地中から染みだした海水が交じり込む事があるからだ。そんな水事情の江戸では良い紅を作るなど無理な話だ。少しでも清水、そして冷たい水を使うとなれば、運んで来るしかない。この店では少しでも清水と、水道の水が混ざらないように、些細な工程でも完全に使う水を分けているのだ。
大店には遠く及ばないが、それでも丁寧な作りの最高の紅を売りたい、と言うのが、この店の主人のこだわりだからだ。職人が作業場を離れて、また戻ってくる時にも、必ず清水で手を濯がせるという徹底ぶりだ。
もちろん、それには大量の水を使う。
その為に水を運ぶ人夫を専任で雇って、日に二度、玉川から水を運び込ませている。作業場のある店の裏手には、その水専用の井戸が据えてあるのだ。海水が混じることがないようにと、漆喰や砂、砂利などで基礎を作り、石枠を使っている。大半の井戸は木枠が普通だ。

「なんだぇ、また昌に叱られてるのかヨ。お前ェも飽きねェノ。ちゃっちゃとしめぇと、朝飯食いっぱぐれるヨ」
この店の主人の娘、華が、元気な声で話し掛けてくる。
勝昌は、紅を作り売るこの店で、紅を作る職人として働いている。先に「勝」と呼ばれている先輩職人が居たため、小僧として入った当初から、皆に「昌」と呼ばれているのだった。
「あっ、お嬢さん！おはようございます！」
小僧は急に張り切った声で挨拶する。何のことはない。華が好きなのだ。華に何とか構って貰いたくて、何のかんのと話し掛ける。
のだが、もう既に手が止まっている。昌はそれを見て、気づかれないように苦笑いをした。

紅を扱う店では端から紅を塗った器で売っている。豪華な桐箱入りで、絵付けされた美しい猪口や蛤の貝殻、蒔絵を施した板紅(旅先などの出先で、紅を塗り直すための板)など。そして庶民でもまだ手の出しやすい、白い猪口やただの蛤の貝殻に紅を塗り込めた物もある。
だが、圧倒的な数で多いのは、器を持ってきて紅だけを塗ってもらう客なのだ。この店で買った桐箱入りの猪口を持参する者も、他の店で買った猪口を持参する者まで居る。勿論、持ち込まれた器に紅を塗って売るのは、紅を扱っている他の店でもやっていることだ。
華は一人娘でありながら、店先に座って紅を塗る手伝いをしている。
普通は、器の内側を塗り潰すように塗った、その器の大きさに応じて代金を取る。通常普通の紅でも猪口に塗れば三十二文から四十八文。高ければ百文から一両位する。この店の紅も概ね、普通の紅を作って売っている。
だが驚くのは、華は指定された代金分だけ塗ることもやってのけるのだ。
どうしても器を塗りつぶして貰うだけの銭が出せず、それでも紅が欲しいと言う者もあるからだ。それも、器を問わず、何処で集めたのか浅利や蜆の貝殻にも塗ってやるのだ。
師走には特別に高い寒紅を売り出すこともあるが、それは寒い時期だけに仕込める

＊お願いとおことわり＊

本PDFは試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本PDFの内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本PDFを有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋
URL: http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/
Mail: nedocoya@gmail.com
Twitter: @nedocoya4pr